

○費鞭…鞭を（何度も）あてる。

『白氏文集』「811 初授贊善大夫早朝寄李二十助教」に「遠坊早起常侵鼓、疲驂行逢苦費鞭」の句が見える。『菅家文章』「331 感白菊花、奉呈尚書平右丞」に「故人知我多芳意、所以孤叢望費鞭」の句が見える。

13 ○臨岐…人を送り、岐路に至って別れる。

『漢語大詞典』には「本為面臨岐路、後亦用為贈別之辭」と説明し、『文選』鮑照の、「舞鶴賦」の「指會規翔、臨岐矩步 李善注、岐、岐路也」の用例を、又、杜甫の「送李校書」詩の「臨岐意頗切、對酒不能喫」の句を引く。

○腸易斷…「斷腸」甚だしく心を痛める。又、甚だしい悲しみ。はらわたのちぎれる程の悲しみ。

『漢語大詞典』には「①割開或切斷腸子 ②形容極度思念或悲痛」と説明し、曹丕の「燕歌行」の「念君客遊思斷腸、慊慊思歸戀故鄉」の句を、又李白の「清平調詞之二」の「一枝紅艷露凝香、雲雨巫山枉斷腸」の句を引く。『白氏文集』「916 答春」にも「其奈山猿江上叫、故鄉無此斷腸聲」の句が、同じく

「142 送蕭處士遊黔南」に「江從巴峽初成字、猿過巫陽始斷腸」の句が見える。『凌雲集』「61 雜言。奉和聖製春女怨」に「君若欲知腸斷處 高樓明月曉孤懸」の句が、同じく「62 奉和江亭曉興詩應製」に「曉猿莫作斷腸叫、四海為家帝者心」の句が見える。↓
補説①

14 ○望闕…宮城をのぞむ。天子を恋慕うこと。

『白氏文集』「興崇文詔」に「望闕之戀深固難奪志」の例が見える。

『漢語大詞典』には「仰望宮闕。喻懷念天子」と説明する。「闕」の字は、尊経閣所蔵本他には「開」と